

米国公共放送局における活動的視聴 (Active Viewing) を促進する 番組制作方針とその番組を活用した授業実践事例† —WGBH 制作の「Between the Lions」を例に—

浦野 弘*

秋田大学教育文化学部

赤堀 正宜**

桐蔭横浜大学

南部 昌敏***

上越教育大学

米国のボストン公共放送局 (WGBH) が制作している、就学前後の子どもを対象とした番組「Between the Lions」に焦点をあて、その番組制作担当者への聞き取り調査をもとに、制作方針と「行動的視聴の促進」に置く教育番組制作の特色を明らかにしている。また、その番組を積極的に活用し、番組利用に指導的な立場の教師の授業を参観し、番組利用の実践を通して、「行動的な視聴」の特徴として、番組と共に歌い、読み、そして映像に話しかけ、語りかけるような視聴の方法であり、また、番組から模倣を通して学び、受け身の静かな経験ではなく、インタラクティブな経験となるように奨励していくことにあると見いだしている。

キーワード：行動的視聴 (Active Viewing), WGBH, 教育番組, Between the Lions

1. はじめに

新しいメディアの登場を受け、大人のみならず、子どもを取り巻くメディア環境は多様化してきている。このような状況であっても、子どものテレビの接触時間は変わらずに多く、また、世界的には、子ども向け専門チャンネルの普及や、既存のチャンネルにおける子ども向け番組の放送の増加が顕著である (例えば、小平, 2004)。一方、日本国内でも、日本小児科学会 (<http://www.jpeds.or.jp/saisin-j.html>, 2006年1月現在) や日本小児科医会 ([http://jpa.](http://jpa.umin.jp/image/PDF/info/proposal01.pdf)

[umin.jp/image/PDF/info/proposal01.pdf](http://jpa.umin.jp/image/PDF/info/proposal01.pdf), 2006年1月現在) 等が、子どものテレビ視聴について警告を発している。さらに、NHK 放送文化研究所は、2002年から0歳児の子どもが12歳になるまで追跡調査を行い、映像メディアの影響や効果を検証しようという試みを始めている。(子どもに良い放送プロジェクト, 2005)。このように、子どものメディア接触、とりわけ、家庭におけるテレビ視聴についての問題点や課題が指摘されている。

一方、学校教育における番組の視聴は、以前に比べ、その利用時間等は減少傾向にあるが、それでも多くの学校で活用されている (小平・西村, 2005)。とりわけ、教育的な配慮のもとに制作された番組を、教育的な方法で視聴する学校での利用は、家庭での一般的な視聴に比べ、教育的な効果が大きいと期待される。すなわち、番組制作者の教育的なねらいと視聴者の教育的な視聴との連携が十分に行われていれば、テレビの教育機能が十分に果たされることにな

2006年1月23日受理

†Principles and Practice of Teaching Active Viewing Skills by Using a US Public TV Program in the Classroom – A Case of WGBH's *Between the Lions*

*Hiroshi URANO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

**Masayoshi AKAHORI, Faculty of Engineering, Toin University of Yokohama, Yokohama

***Masatoshi NANBU, Joetsu University of Education, Joetsu

表1 WGBHが制作・放送している児童・生徒・学生向け教育番組

番組名	内容	対象
(1) Arthur	言語・生活指導	幼児・小学校低学年
(2) Between the Lions	言語・総合	幼児・小学校低学年
(3) Zoom	科学・言語	小学校
(4) Nova	科学	中学校・高等学校
(5) American Experience	歴史・文化	高等学校・大学
(6) Eye on Education	教育問題	教師・大学

表2 登場するキャラクターと構成・演出の形式

番組名	キャラクター	構成・演出形式
(1) Arthur	はつかねずみの少年と家族	アニメーション
(2) Between the Lions	4匹のライオン家族と地域	人形劇 スタジオセット
(3) Zoom	7人の子ども	スタジオ ビデオインサート
(4) Nova	科学者	現地中継・スタジオ+VTR
(5) American Experience	テーマによる人物, 事象	ビデオ構成・ドキュメンタリ
(6) Eye on Education	解説者	スタジオ ビデオインサート

る。さらに、テレビ視聴に対する望ましい態度の形成にもつながるものである。

ところで、米国の教育関係の公共放送は、すべての放送局が教育番組を制作しているというわけではなく、制作能力のある特定の公共放送局が良質な番組を制作し、それをPBS（Public Broadcasting Service、公共放送サービス）へ持ち寄り、配信・放送するという仕組みになっている。その中でも、ボストンに本拠をおくボストン公共放送局（コルレター WGBH）は米国で優れた教育番組を制作している局として知られている。

筆者らは、これまでに、このWGBHの番組が、行動的学習理論にもとづき、その学習を動機付けるためにActive Viewingを促進する番組制作をしている点に着目し、番組制作者への面接、教育現場の授業実践等の調査研究を行ってきた。この一連の調査の中から、主として番組「Between the Lions」に焦点をあてて、その番組の特徴と、具体的な授業実践の事例を通して、番組の活用方法、とりわけ、学校における視聴時のActive Viewingについて報告をする。

2. WGBHのActive Learningを促進する番組制作

(1) WGBH（ボストン公共放送局）について

前述のように、ボストンに本拠をおくボストン公共放送局（WGBH）は、1951年にラジオ放送を開

始して以来、米国でも、優れた教育番組を制作する局として知られており、その番組の質は高く、広く全米で利用され、その制作番組の数も多い（赤堀、2001）。

このWGBHが制作・放送している番組の一つに、1972年に開発し、現在まで継続している6歳から12歳の子ども向けの科学・言語を内容とした番組「Zoom」がある。このズームは、2002年の日本賞教育番組国際コンクールで優秀Web賞を受賞し、WGBHの番組制作のスタンスであるActive Viewingが注目された。また、2005年には青少年向け歴史番組『アメリカの来た道 マシー夫人事件』が国際交流基金理事長賞を受賞している。

このWGBHが制作・放送している児童・生徒・学生向け教育番組の一部を、表1に示す（赤堀、2004）。

さらに、同放送局で制作している番組は、日本国内において、NHK教育放送で「ライオンたちとイングリッシュ」という番組名で、「Between the Lions」が4～7才の子どもを対象とした英語学習番組として放送されている。

(2) Active Learningの思想とメディア・リテラシー

Active Learningの思想は、従来の伝統的講義形式の教育・学習方法から、学習者中心の新しい学習・教育へのパラダイム変換を指している。すなわち、

Criticalな思考法を育て、学習者による発見や知識の構築を促し、自らの手で「学び」を生み出すことができる環境を作り出すアプローチである（例えば、Silberman, 1996）。

この思想は、アメリカ実用主義（Pragmatism）に根ざした教育思想家 John Dewey の経験主義教育思想に通じる。読み、書き、聞くという領域の学習において能動的に学習に参加すること（doing）によって、創造性や批判的なものの見方の育成を図るものである。従って、教育番組視聴の方略は、メディア・リテラシー能力の育成に連なっていると言える。

ところで、映画視聴を出発点とした英国のメディア教育に組んできている Buckingham (2003) は、このメディア教育では、以下の三つの側面が重要であることを指摘している。

- ①メディアに対する批判的理解
- ②メディアへの能動的（Active）参加（利用、検索など）に関する教育
- ③メディアの制作能力の育成

つまり、メディア教育は子どものメディアに対する活動的で、批判的、創造的能力を育成することであると言える。このような視点に立つと、番組をActiveに視聴するという事は、番組視聴におけるCriticalな解釈と類似する。その意味では、Active ViewingはCritical Viewingであると言える。

一方、就学前後の子どもの番組視聴におけるActiveとは、Criticalな解釈というよりはむしろ、視聴とともにActiveに行動し、視聴後にもその学びを生かして、Activeに活動することと捉えた方がよい。

3. WGBHの番組制作方針 —Between the Lionsを手がかりに—

筆者らは、ボストンにあるWGBHを2005年9月に訪問し、表1にある①Authur, ②Between the Lions, ③Zoomの三番組の制作スタッフに聞き取り調査を行った。また、これに関連したWeb教材を製作するスタッフからの聞き取りも行った。さらに、ワシントンにあるPBSも訪問し、教育番組全体のから見たActive Viewing等についても調査を行ってきた。

以下、本報告では、②の「Between the Lions」に焦点をあて、報告をする。

この番組は、表1及び2に示すように、子どもの言語と読書能力の開発を目指す総合番組であり、幼児から小学校低学年を対象にした「Sesame Street（セサミストリート）」の後に視聴する番組と位置づくものである。

(1) 日本での番組「Between the Lions」の取り扱い

前述のようにこの番組は、日本国内では、NHKの教育放送で「ライオンたちとイングリッシュ」という番組名で、4～7才の子どもを対象とした英語学習番組として放送されている。NHKのホームページ（HP）では、「音楽やアニメ、人形劇を駆使して、子どもたちが自然に、英語を読む力や書く力（リテラシー）、発音などを身につけることができるよう、構成されています。韻を踏む単語を多く紹介したり、フォニックス（音声法）を効果的に取り入れているのが特徴で、番組全体が本を読む楽しさと、言葉の面白さにあふれています。アメリカでは“Between the Lions”という名前で放送され、2001年のエミー賞で3部門受賞に輝くなど、たいへんな好評を博しました。“Between the Lions”とは、「行間を読む」という意味のイデオム“Between the lines”をもじって名づけられたものです。ぜひお子さまと一緒に、年間を通じてシリーズでご覧いただくことをおすすめします。」と解説されている（<http://www.nhk.or.jp/lions/>, 2006年1月現在）。

また、Q & Aコーナーで、番組の名称の由来を、「行間を読む」という意味の英語の表現“Between the Lines”と、主人公のライオンを組み合わせて“Between the Lions”というタイトルが生まれましたが、この中には言葉の持つ広がりや意味を深く理解して欲しいという番組制作者の願いが込められています。」と説明している（<http://www.nhk.or.jp/lions/faq.html>, 2006年1月現在）。

(2) 番組「Between the Lions」の特徴

日本での利用と同じく、4～7才の子どもを対象としている。親子の4匹のライオンが登場する。読書に長けた父親を中心に、母親のライオンと、7歳のライオネルという兄ライオン、4歳のレオナという妹ライオンが織りなす、寸劇、音楽、おしゃべり、おどり、ゲーム等のセグメントからなる番組である。子どもの2匹のライオンが狂言回しの役を演じるとともに、ゲスト的な訪問者とのコミュニケーション

資料1 WGBHのHPにある保護者や教師向けのページ
(<http://pbskids.org/lions/parentsteachers/>)

**Parents and Teachers:
a Survival Manual**

Welcome to the Between the Lions Parents & Teachers area! Here's where you'll find everything you need to know about the program and the Web site, plus teacher guides, parent activities, and more. Use the links at the top to explore everything we have to offer.

Be sure to check out our [Kindergarten Teachers Guide](#), which models our innovative approach to teaching literacy.

Additional Resources:

About the Program
Episode descriptions, curriculum information, viewing tips, and more.

About the Site
A site map, site usage tips, guides to our site's features, copyright information, plus Web credits.

Activities
A listing of real-world projects to extend the teachings of our television series.

TV Schedule
Where do you go to watch the show?

Resources
Tons of Lions-related resources including teachers guides, word puzzles, recommended books, literacy video clips, a link to our Cornerstones project for students who are deaf or hard of hearing, and much, much more.

Help
Need answers to Frequently Asked Questions, technical help, or just want to get in touch with us? Here's where to go.

ンで構成されている。

WGBHの番組全体に言えることであるが、教師や保護者向けのHPが充実しており、解説も丁寧である(番組のHPは、WGBHのHPではなく、番組を配信しているPBSのHPに置かれている)。その例を、資料1に示す。これは、教師と保護者向けの案内である。

(3) WGBHにおける聞き取り

上記のような背景をもとに、WGBHを訪問し、番組のExecutive ProducerのJudith Stoia女史と、Project DirectorのBeth Kirsch女史から、聞き取り調査を行った。また、この番組を全国ネットに配信し、学問的背景についても支援を行い、視聴者からのこの番組へのアクセスのためのHPを統括しているPBSでのChildren's ProgrammingのAssociate DirectorのPaul E.Siefken氏と、Administrative

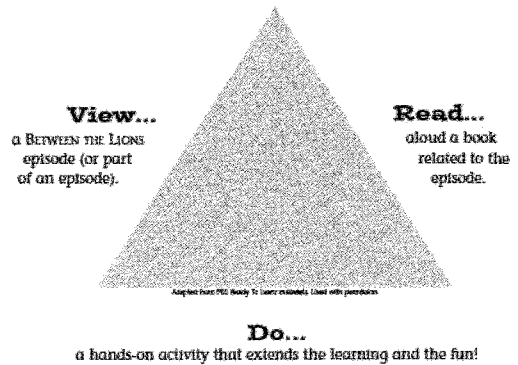


図1 Active Viewingの構成
(<http://pbskids.org/lions/parentsteachers/resources/handbook/pdf/lions-hbk-activities.pdf>)

AssistantのBrad W.Pettingell氏からも聞き取り調査を行った。

この両聞き取り調査から、行動的視聴(Active Viewing)を促進する番組制作は、以下のようなスタンスのもとに行われていることがわかった。

- ①PBSの提唱するReady to Learnに見られる、番組を見て⇒関連する図書を読み⇒なにか楽しいことを行う(積極的に学習に参加する番組)という基本的スタイルが番組「Between the Lions」でも実践されている(図1参照)。これが、Active Viewingである。
- ②幼少期の子どものリテラシー低下が問題となっており、この番組では、特にReading能力について、その向上を目指している。PBSで配信している就学前の子どもを対象にしている著名な番組「Sesame Street(セサミ・ストリート)」では、文字や数字について触れているが、この番組「Between the Lions」はその次のステージである、音の理解や文字と結びついてできる単語について扱っている。
- ③読むことは便利で楽しいことであるから、それを支援することで子どもの言語学習をより深めることに努めている。
- ④そのため、幼稚園や小学校の教師やReading Specialistと共に制作を行っている。
- ⑤図1にあるView, Do, Readという3つの側面ごとに、セグメント方式によって番組が制作される。
- ⑥よい番組の場合には、それを繰り返し長期間に

わたり放送をする。Between the Lions では、およそ80のエピソード（一回の放送分の内容をエピソードと言う）が用意されている。

- ⑦子ども達に親しまれる（コミュニケーションできる）番組として、キャラクターを考えている。概して、子ども達は動物が出てくると喜ぶので動物の人形を活用している。
- ⑧イメージキャラクターを用意している。ライオンの家族が知識の象徴である図書館にいて、そこで織りなす物語である。物語に即して役割は変わるが、人物の登場の他に、多くの動物が登場する。その中で日本と異なる点の一つは、豚はよく敵の役で利用されている。
- ⑨視聴刺激として、音楽や効果音に工夫をしている。
- ⑩補助教材の配布物（物語の掲載されている本、カード、教師のための利用の指針、手引き等）が充実している。また、読み物教材も、エピソード毎に、それに対応する読み物のリストがあり、その本の購入も容易になっている。
- ⑪上記の目的のために、Webサイトからの教材配布に努めている（Webサイトを専門に担当するスタッフがいる）。
- ⑫ビデオに収録して配布することも行っている。また、ビデオに収録し、視聴することも勧めている。生視聴ではなく、教師は事前に番組を視聴し、内容を把握した上で、子どもと共に視聴することを奨励している。
- ⑬番組を核としてマルチメディア教材による学習参加を意図している。Webの活用もその一例である。
- ⑭ReadingのConceptを学ばせるために、物語に関わる文字を画面上にハイライトにして表示するように工夫している。それは、単語を視覚的に見たり、一人で読むためのスキルの向上につなげようとしているためである。
- ⑮とりわけ、言語習得では、特に母音の習得に重きを置いている（後述するJames St. Clair先生の②のイ）参照）。
- ⑯利用のために、教師のワークショップを開催し、また、リテラシーの調査研究も行っている。
- ⑰なお、このタイトルの「Between the Lions」は、NHKのHPにある解説のみならず、別の説明もあった。図書館の両サイドにはライオン

の像が置いてあることが多い。そのライオンの間を通して図書館の知識の習得に向かう。そこで「図書館の扉を開けて言葉の勉強をしましょう。」「様々な読みの基としての本は図書館にある。」という願いをふくめた「象徴」であるということもわかった。

4. 授業実践の事例

こうした制作側の意図が、教育現場でどのように具現化しているか、また具現化が可能であるかを検証するために、ボストンに隣接するケンブリッジにあるAmigos小学校を視察した（図2参照）。この小学校は、Kindergarten Studentsから8th Grade StudentsまでのPrimary Schoolである。また、子どもの3分2強がヒスパニック系であり、英語が話せない子もいる。そのため、言語教育に力を入れている。その素材の一つとして、この番組も利用されている。

同校のJames St. Clair先生が番組「Between The Lions」のエピソード#212「Oh, Yes, It Can」を用いて実施した授業を、参観した。参観後に、同行したWGBHのOutreach CoordinatorのNatalie Hebshie女史、Outreach AssistantのGay Mohrbacher女史らと共に、小学校における映像番組の活用に関する目的・方法等についての基本的考え方について、議論した。

なお、James St. Clair先生は、このBetween the Lionsの制作にも、Senior Educational Advisorとして参画している方である。

以下に、その概要を示す。

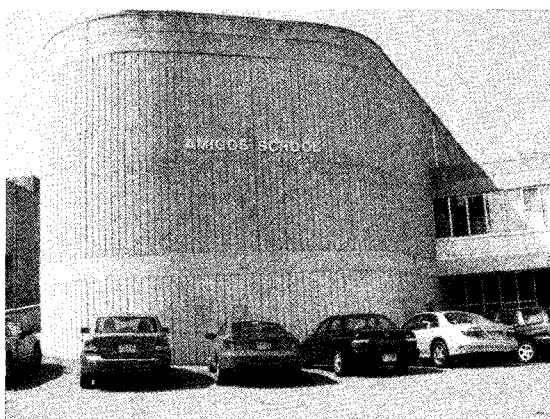


図2 Amigos 小学校

(1) James St. Clair 先生の Active Viewing による
授業へのスタンス (View へのスタンス)

- ア) 前もって番組を視聴し、その内容をよく把握しておく。
- イ) 授業では、必ずビデオで視聴し、生放送を利用することはない。
- ウ) 重要なところは一時停止をして解説をし、子どもと一緒にそれを反復発声をする (図3参照)。
- エ) 番組にはダイアログ (慣用句) が何度も出てくるが、それも子どもと一緒に読み上げ、繰り返し発音練習をする (図4参照)。
- オ) 子どもと一緒に活動する (図5参照)。
- カ) 子供が興味を示した部分は記録しておき、そ

のような場面を繰り返し視聴する。

- キ) 朗読で使われた物語の本を用意しておき、それを読み聞かせる。
- ク) 横になって視聴してもかまわない。
- ケ) 時には番組を短くして、見せる。

(2) Jim St. Clair 先生の「視聴後の指導」(Read
と Do へのスタンス)

- ア) 番組を想起させ、その場面の絵を描かせ、それを簡単にみんなの前で発表させている (文字ではなく、絵で自らの思いを表現するようにしている) (図6参照)。
- イ) 子どもにカードを持たせ、番組と同じように単語の合成をさせる。例えば、番組に出てき

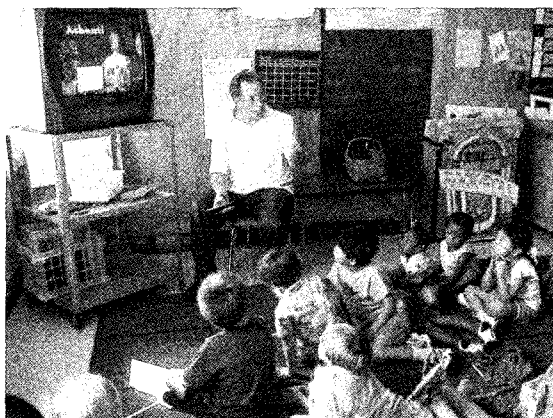


図3 一時停止して説明する Clair 先生と、視聴する子どもたち



図5 番組中の踊りを一緒に踊る Clair 先生 (非常に行動的である)



図4 ダイアログと一緒に読む Clair 先生 (指し棒を活用している)

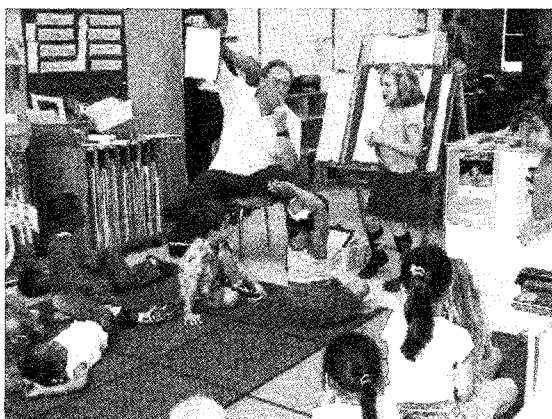


図6 番組を想起させ、描かせた絵を、他の子ども達に提示



図7「語の合成」をゲーム

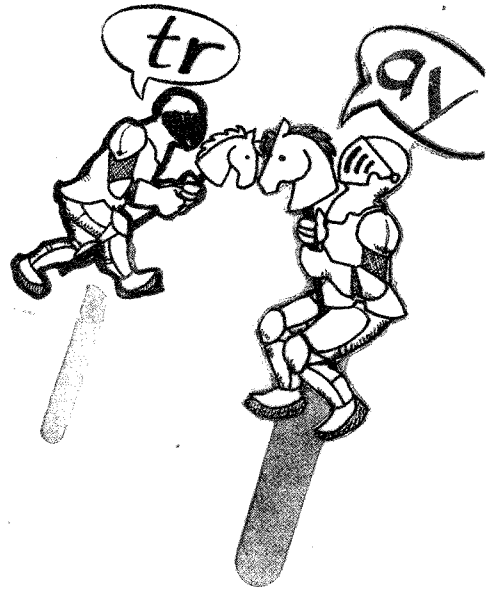


図8 番組のエピソードに関連した読み物と一緒に見る



図9 一緒に歌を歌う
一人の子どもが指名され、歌詞を追う

資料2 図8に用いたキャラクター
持つ棒はアイスクャンディの棒
教師はこの絵をダウンロードして使える



た「tr」と「ay」の文字が書かれたキャラクターのカード（資料2参照）を二人の子どもが持ち、そのカードをかざして互いに近づき、そのカードを合体させることにより、「tr」という語になるという、「単語の合成ゲーム」を行う（図7参照）。このような体験を通して、語彙を覚えていく。

- ウ）番組には物語を朗読する部分があるが、視聴後には、できるだけ同じような内容の絵本と一緒に読む（図8参照）。
- エ）歌は語彙学習の重要な行為となる要素なので、みんなで歌う。参観の時には、ギターを先生が弾き、みんなで歌っていた。例えば、Wの音で子どもが問題だと思うときには「W Trouble」という歌を歌う（図9参照）。
- オ）番組の進行と同じように、子どもと一緒にActiveに活動をしている。

(3) James St. Clair 先生の取り組みへの基本的なスタンス

聞き取り調査と授業参観を通して、James St. Clair 先生が持つ映像を用いた授業実践への基本的な考え方は、以下のように整理できると思われる。

- ア) テレビは視聴するものでなく、番組内の活動に参加して、話しかけるものである。
- イ) 行動的視聴 (Active Viewing) は、画面とともに歌い、読み、そして映像に話しかけ、語りかけるような視聴の方法である。また、番組から模倣を通して学び、受け身の静かな経験ではなく、インタラクティブな経験となるよう奨励している。
- ウ) テレビは行動的学習 (Active Learning) を促進する道具 (ツール) である。そこで、視聴後、確かめ、復習、発展の学習をすべきである。
- エ) 視聴をとおして暴力、性番組への批判的視聴能力を育成できると考えている。なぜならば、良い番組はどのようなものかという基準が学習されるからである。
- オ) 教師も子どもと一緒に活発かつ積極的に (Active に)、番組視聴に参加すべきである。
- カ) 映像を子どもに押し付けてはならない。
- キ) ビジュアルリテラシーは、番組制作者、教師、子どもの三者が共に持つべき能力である。

5. まとめにかえて

本調査によって、次のような点が確認できた。

まず、第一に、番組制作と教育現場での活用が、図1に示したPBSの提唱する「Ready to Learn Learning Triangle」に沿って実施されていると言う点である。番組を視聴し、そのエピソードに関連した読み物を声を出して読み、そして、それに関連したことを実際にやってみるという3つの視点(側面)が、番組制作側にも、利用者である教室の実践においても、それが十分反映している点である。とりわけ、番組の各セグメントは上記のいずれかの側面から制作されている点である。

次に、番組全体の長さは30分程度あり、NHKの学校放送番組に比べ、倍近い長さがあるという点である。しかし、番組のテンポは速く、短時間で次のセグメントに移っていく。その各セグメントの構成は上記のような特徴を持って構成されている。視聴後の教室での指導も、番組(エピソード)の中の特徴的なセグメントの繰り返し、もしくは焼き直しでというような方法で、学びの繰り返し(復習)をしている。番組を想起させ、その場面の絵を描かせることはしているが、番組全体をおさらいするという

ようなことはなかった。

さらに、授業参観した際に見られたClair先生のActiveさが重要と思われた。図4, 5にあるように一見、単にイスに座ったまま授業をしているように感じられるが、そこには、

- ・重要なところは一時停止をして解説をし、子どもと一緒にそれを反復する
- ・ダイアログ(慣用句)を子どもと一緒に読み上げ、繰り返し発音練習をする

という教授行動へのつながる布石がみられる。また、子どものテレビへの視線とほぼ同じ方向に、自らの顔を位置づけるとともに、図5からわかるように子どもの視聴には邪魔にならない位置にイスを配置している。このような一連の過程をふまえて、Active Viewingを捉える必要があらう。

また、今回の視察から得られた番組作りの姿勢の一つは、「学校」という閉じられた教室空間での利用のみを考えているのではないという点である。学校、After School、家庭という3カ所での視聴を意識しているという点である。日本的に言えば、学校放送を、学校での視聴にのみではなく、学童保育や社会教育での利用と、家庭教育への切り込みに活用することである。この点は、特に、番組「Zoom」の制作の姿勢に現れていた。日本においても、科学離れが深刻化する中、「科学する心」を育てるという意味でも、学童保育や週末での社会教育の有様に参考になるものである。WGBHのすべての番組が、番組「Zoom」だけではなく、Webページの充実にも非常な努力がなされている点にも学ぶべきである。

参考文献

- 赤堀正宜(2001)『ボストン公共放送局(WGBH)と市民教育』東信堂
- 赤堀正宜(2004)「「ズーム」に見る行動的視聴を促進する番組制作—アメリカボストン公共放送局の教育番組制作スタンス—」『平成15年度客員研究員報告上越教育大学学校教育研究センター』pp.41-58
- 小平さち子(2004)「子ども向けテレビ番組をめぐる世界の動向」『放送研究と調査』第54巻, 11号, pp.8-27
- 小平さち子・西村規子(2005)「デジタル時代の教育現場におけるメディア利用と今後の展望」『放送研究と調査』第55巻, 5号, pp.28-47

“子どもに良い放送”プロジェクト (2005)『第2回フォローアップ調査結果報告』NHK放送文化研究所

Buckingham, D. (2003)『Media Education』Polity Press

Silberman, M. L. (1996)『Active Learning:101 strategies to teach any subject』Allyn and Bacon

参照ホームページ (2006年1月現在)

NHK「ライオンたちとイングリッシュ」のホームページ：<http://www.nhk.or.jp/lions/>

NHK「ライオンたちとイングリッシュ」のホームページ：<http://www.nhk.or.jp/lions/faq.html>

PBSのBetween the Lionsのホームページ：
<http://pbskids.org/lions/>

A Final Report to Mississippi Educational Television：<http://pbskids.org/lions/parentsteachers/program/research/pdf/BTL-Mississippi.pdf>

附記

1. 聞き取り調査に快く応じて下さった WGBH 及び PBS の関係諸氏、並びに、授業を提示して下さい下さった Amigos 小学校の James St. Clair 先生には、深く感謝致します。
2. 本稿は、第12回日本教育メディア学会年次大会において口頭発表したものに、加筆・修正したものである。
3. 本研究は、平成16, 17, 18年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (課題番号16300266) の支援を受けて行ったものである。

Summary

The preset paper reports on the characteristics of a TV program Between the Lions produced by the WGBH located in Boston, USA. The program is intended for the level of pre-school children with its main purpose being to help students develop interactive skills by watching the program. Interviews were conducted with the production staff of the program. A subsequent analysis of the data revealed a set of principles that would help develop TV programs useful for school education. One of the principles, so-called the principle of active viewing, holds that the program viewer should not just be a passive recipient of information, but should be an active participant, in the sense that they should sing, read, even talk to the screen, and engage themselves in other interaction activities. This and other principles were observed to have been embodied with the help of those teachers who possessed a great amount of expertise in the field.

Key Words : Active Viewing, WGBH, Educational TV Program, Between the Lions

(Received January 23, 2006)